様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３１０６

研究課題名（和文）１９世紀中半のアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究

研究課題名（英文）Studies of the Selfunderstanding of the United States Reflected on the Visions of the Pacific Ocean at the Mid-Nineteenth Century

研究代表者
遠藤　泰生（ENDO, Yasuo）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：５０１９４０４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀アメリカ合衆国の歴史においては、太平洋世界への同国の進出が、軍事・外交・貿易等の分野における同国の勝利としてもっぱら語られ、太平洋という未知の空間に遭遇した国民の不安や希望が、アメリカ固有の太平洋像に結実する過程はほとんど語られることがない。そこで本研究では、19世紀初頭以来のアメリカ海事史の成果を批判的に継承し、海という空間そのものの認識が国民の間に具体化され、体系化されていく過程を検証した。具体的には、アメリカ国立公文書館、アメリカ議会図書館、ニューヨーク歴史協会、ハーバード大学図書館などに所蔵される一次史料の調査を行い、そこに描出されたアメリカ国民の太平洋理解の変容をたどった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
ヨーロッパ史学の世界においては、イギリス、フランスを中心に、海の世界史を海民の歴史として再検討する動きがある。本研究はそれらの研究にアメリカ合衆国史の成果を接続し、アメリカ合衆国史のトランスナショナルな側面を強調することに努めた。歴史研究の方法としては、旧来の外交文書や貿易商人の航海記に加え、アメリカ海軍天文台設立関係一次史料を調査することで、海洋世界が多くの海図に図像化された経緯と、世界の海洋を体系的に把握しそれを科学知識として国際社会に流布させることにアメリカ合衆国が主導的役割を果たしたことを、明らかにした。
以上により、海のアメリカ史の端緒を開くことができた。

研究成果の概要（英文）： In the 19th-century history of the United Sates, the story of American encounter with the Pacific Ocean often ends with her triumph over other nations in trade, war, and diplomacy.　But fear and aspiration for the future which the Americans projected on their vision of the unknown Pacific Ocean have not been fully examined.
This study, drawing on the critical reexamination of 19th-century American maritime history, successfully reveals the process of how the Americans developed, and painstakingly corrected, their understanding of the Pacific world, through the close reading of various kinds of primary sources, collected at NARA (National Archives and Research Administration), LC (Library of Congress), New York Historical Society, and Harvard University libraries.

研究分野：アメリカ合衆国史

キーワード：太平洋　合衆国海軍　合衆国海軍天文台　マシュー・Ｆ・モーリ　マシュー・Ｃ・ペリー　世界海洋気象会議　捕鯨　英国海軍

１．研究開始当初の背景

1997 年度から 2004 年度の間、二度の基盤研究(C)により、18 世紀末から 20 世紀転換期にいたるまでの合衆国における太平洋像の変遷を通史的に検討し、1998 年から 2002 年には特定領域研究の研究分担者として現在の太平洋地域の構造変動に果たす合衆国の役割を学際的に追求した。しかし、現代のアメリカ合衆国における重層的な海洋理解とそれに至るまでの 19 世紀、20 世紀の海洋進出の歴史との間に、研究者の視野のひろがりや、視点の立体性、使用する歴史資料の幅などにおいて、おおきな隔たりがあることを痛感せざるを得なかった。本研究は、19 世紀半ばの合衆国における自文明への反省、科学技術の刷新、海洋意識の変容などに太平洋が果たした役割を明らかにしつつ、合衆国史における海の歴史の新たな可能性を探ろうとして企画された。

２．研究の目的

19世紀アメリカ合衆国の歴史は、南北戦争を通して統合を強化した国民国家が西漸運動を完遂させる過程として語られることが多い。そのため太平洋をこの歴史に包摂する際には、同海域への海軍の進出や貿易航路の開拓を大筋とする陸の活動の拡張の舞台としてその存在を取り上げることが多い。だが当時の合衆国の人びとにとって、太平洋は未だ人知の及ばぬ謎と危険に満ちた空間であり、そこに集積された国民の海洋経験や集合記憶が合衆国固有の太平洋像へと結実する、陸の歴史から自立した海の歴史を紡ぐ試みがもっとなされてよい。太平洋を含めた地球大の時空間に合衆国を定位させる過程で自国と世界との関係性を再構築することを余儀なくされた人々の活動とその世界像の変容を、海の歴史の一端として把握することに本研究は目的をおく。

得られた知見をアメリカ太平洋地域研究センターより内外に発信し“海のアメリカ史”を担う拠点作りの第一歩とする。

３．研究の方法

アメリカ合衆国で綴られる太平洋海事史においては、合衆国連邦議会に提出された各種政府機関の報告書や、捕鯨船、交易船、海軍軍艦の公式航海記などが主たる史料とされてきた。しかし本研究においては、例えば同じ連邦議会の提出された文書でも、太平洋を取り囲むロシア王朝やメキシコ政府との交易の可否を問う国務省に提出された民間人の書簡、あるいはまた、海軍天文台設立にともなう海軍科学将校の学術的な報告書などにも周到な目配りをし、海上の活動そのものだけでなく、19 世紀知の世界に入り始めた海という大規模な空間の意味を多角的に検討するアメリカ国民の営みを明らかにすることに力を注いだ。具体的には、国立公文書館新館（NARA II）が所蔵する海軍水界地理学測量局（Hydrographic Office）発行の各種海図の刊行経緯を跡づける作業、連邦議会図書館(LC)が所蔵する海軍天文台(Naval Observatory)長Matthew Maury Papersの調査、ハーバード大学図館歴史地図コレクション（Collection of Historical Maps）での海図調査などが、史料調査の主要部分を占めた。

海図、古地図を図像史料として研究調査に活用したものはまだ多くの例がない。日本では第二次世界大戦中の外邦図の研究を先導した大阪大学文学部がそうした手法の開発に取り組んできたことが分かっている。その部局の研究院による上記国立公文書館新館の調査報告も既に刊行されている。が、例えば天文台長Matthew F. Mauryが主導し夥しい数のテーマ別の海図が刊行されるまでの各国天文台との情報の交換および蓄積を含めた、海図発行までの全貌を語る史料調査は十分に進んでいない。国際的な科学知の世界に太平洋を定位していくうえで、アメリカ合衆国の海軍天文台が果たした役割は大きく、Mauryの私信を含めた文書の解読整理が今後強く望まれる。19世紀手稿史料の解読は、国民の義務教育が進み誰もが読み書きを強制されるようになった時代故に悪筆が増え、逆に難しくなったという逆説を含むが、同時代歴史研究者の支援も受けながらその作業を今後進めたい。

当初予定はしていたものの、ほとんど進捗を見なかった「鯨絵」の解読も次の課題として残っている。本プロジェクト展開中に調査を行ったマサチューセッツ州のミスティック・シーポート博物館や同じくマサチューセッツ州セイラムのピーボディ博物館には、「鯨絵」が相当数残されていることがわかった。絵画として消費されたその資料の性格に、今後さらなる検討を加えたいと考えている。

４．研究成果

例えば19 世紀半ばに日本に派遣されたペリー艦隊が幕府に差し出した要求に、薪炭の補給を行うための港の開港、漂流合衆国捕鯨船員の人道的な扱いとその返還、日本との交易の開始などが挙げられていた。これらの史料を根拠に、アメリカ合衆国のアジア交易構想や1830 年代から40 年代にかけて隆盛をきわめた合衆国の捕鯨産業との関連からペリー艦隊来日の意味を推測するのが、今までの研究では一般的であった。しかし、それらはあくまで日本の開国史から見たペリー艦隊来航の意義に過ぎないのではないだろうか。そのほかに「中国および日本近海への艦隊派遣」を合衆国政府が企画した理由はあったはずである。例えば、世界の海洋を一つの統一的な知の体系に収め、それを学術的な世界で共有出来る科学的知識に整理することが、ペリー艦隊派遣時の海洋学の第一の要請であった。実際、その要請に答える形で、洋上での経緯度天体観測を合衆国海軍天文台はペリー艦隊へ依頼していた。有名な『ペリー遠征記』が大きく分けて三部から構成され、その一部がまるまる洋上での天体観測記録にあてられているのは、そうした理由からである。海軍科学将校がそれらの知を整理し、やがてはイギリスやフランス、ロシアをも巻き込んだ、国際海洋気象学会議の開催にまで行き着く歴史の流れなど、日本ではまだほとんど知られていない。アメリカ海事史に備わるそうしたトランスナショナルな性格が、今回のプロジェクトで前面に出てきた事は、今後の海のアメリカ史の展開を予示する大きな成果と評価出来る。海のアメリカ史は探求すべきトピックをまだ数多く抱えていることがこのことからも明らかになった。

科学史との接点から得られる以上の考察に加え、一方で、史料調査から得られた新たな知見を他の海域を専門とする研究者と交換することで、19 世紀海洋交易史全体の中でアメリカ合衆国が占める位置を再検討する必要も見えてきた。ことに、海に関わるさまざまの人々を「海民」と総称し、彼らが残した「海のリテラシー」を陸の歴史と接続することを企図する研究グループとの意見交換はこの側面の考察を深めるのに有用だった。例えばこのグループで、西インド洋アフリカ沿岸地域を活動領域としたインドのグジャラ地方出身の海民が、アメリカ合衆国の資本を導入してインド洋の物流体系を整えていたことを学んだ。太平洋に進出する以前からその物流システムへの関わりをアメリカ合衆国、とくに北東部の交易商が模索していたことは、大西洋・太平洋・インド洋のグローバルな交易の流れに早くから彼らが着目していた事実を語り、19 世紀に入って本格的な太平洋進出を図った同国の活動が初期の段階からグローバルな海の体系を視野に入れた活動であった可能性を示唆する。さらに、インド大陸にフランス、ポルトガルが開いたポンディシェリ、ゴアなどの海港都市から、マカオ・香港回りで長崎にまで及ぶ交易ルートが繋がっていた事実は、ペリー来航以前に地球を取り巻く交易路のヴィジョンがかなりの程度まで整っており、言わばそのパズルのミッシングパートの充足を目的にアメリカ合衆国のアジア太平洋地域への進出が図られた可能性を示唆し興味深い。ニューヨーク歴史協会にはペリー艦隊を編成する際に同市の経済界が積極的な支援を表明した事実を示す史料が残されているが、それらの組織の活動が世界大の交易の可能性をどこまで視野に入れて日本の開国を支持していたのか、さらなる調査を行ってみなければならない。日本の開国をアメリカの世界海洋政策の一端と位置づける視点が、日本史を軸に展開してきた従来の研究にはまだ弱い。今後の新たな調査の方向を示唆する成果として、以上の考察を記しておきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　7　件）

① 遠藤 泰生、「「19 世紀半ばのアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究」――環インド洋・環大西洋・環太平洋」、アメリカ太平洋研究、査読無、Vol.19、2019、pp.117-118

② 遠藤 泰生,「海から見るアメリカ史の可能性と課題：笠井俊和『船乗りがつなぐ大西洋世界―英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房、2017）を読む」、アメリカ太平洋研究、査読無、Vol.19、2019、pp.87-96

③ 遠藤 泰生、「センタープロジェクト紹介：19 世紀中半のアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究」、CPAS Newsletter、査読無、Vol.18 no.2、2018、p.7

④ 遠藤 泰生、「＜佐伯彰一文庫＞と『日米関係のなかの文学』のこと」、比較文学研究、査読無、103 号、2017、pp.148-152

⑤ 遠藤 泰生、「センタープロジェクト紹介：19 世紀中半のアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究」、CPAS Newsletter、査読無、Vol.18 no.1、2017、pp.8-9

⑥ 遠藤 泰生、「活動報告：19 世紀中半のアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究」、CPAS Newsletter、査読無、Vol.17 no.2、2017、pp.8-9

⑦ 遠藤 泰生、「活動報告：19 世紀中半のアメリカ合衆国における太平洋像とそこに映し出された合衆国理解の研究」、CPAS Newsletter、査読無、Vol.17 no.1、2016、pp.6-7

〔学会発表〕（計　2　件）

① 遠藤 泰生、「海・ネイション・科学―19 世紀の太平洋を考える」、科学研究費基盤 C「環太平洋地域マイノリティ史から問い直すアメリカ史研究」、2018

② 遠藤 泰生、「19 世紀半ばのアメリカ合衆国と太平洋：マシュー・F・モーリの活動から」、科学研究費基盤 C「西洋近代の海洋世界と「海民」のグローバル循環―北大西洋海域から」、2018

〔図書〕（計　1　件）

① 遠藤泰生 編、東京大学出版会、近代アメリカの公共圏と市民：デモクラシーの政治文化史、2017、349

〔その他〕

東京大学アメリカ太平洋地域研究センター

http://www.cpas.c.u-tokyo.ac.jp/pub/index.html

６．研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。